

*The Economist*を基にした“whom”の考察

大賀 信孝

“who”という代名詞だが、これの主格は“who”，所有格は“whose”，目的格は“whom”である。このことから判断する限り用法は明確であるように思える。でも実際は、これが厳格に守られてばかりいるのではない。具体的には、主格“who”の用法と所有格“whose”の用法はきっちり守られている一方で、“whom”についてはその用法領域に“who”が進入してきたり、

But in practice *who* is commonly also used for object functions [5] - [6] except in formal style, where it is replaced by *whom* [7] :

[5] *Who* didn't you like [S1A-037-53]

[6] Anyway so < , , > *who* else can we nominate [S1B-079-61]

[7] When was it last serviced, by *whom*, and what service agreements or guarantees exit? [W2D-012-56]⁽¹⁾

“whom”を挿入すべきところで“whom”が省略されたりしている。

Finally, it is worth pointing out that often we use no relative pronoun at all (the ‘zero relative’) in preference to *whom*:

Any member the Secretary has not contacted by Tuesday should phone her as soon as possible.

The person I gave my booking form to lost it.⁽²⁾

つまり“whom”だけが用法領域を狭められているのである。受難に遭遇し、危機に“whom”はひんしているというべきかもしれないが、こうした傾向は第二次世界大戦後、次のような決定を背景に定着してきた。

Sometime after World War II the rule makers decided that *whom* was doomed.⁽³⁾

ところでこのように見てくると、“whom”の運命は風前のともしびのように思える。まことにわびしい限りだが、でもしかしである。上記ような決定にもかかわらず、“whom”のいわば寿命に関して見解が一枚岩のようになっているわけではない。

One way or another, the days of *whom* are probably numbered.⁽⁴⁾

というように、“whom”の寿命が尽きることを主張する見解がある一方、

So, like Mark Twain's death, whom's doom was prematurely proclaimed.⁽⁵⁾

というように、“whom”の寿命が尽きることを主張するのは時期尚早というような見解もある。見解は分かれている。よって、このことについて現時点でどうこうだという判断はくださないほうがいい。時の推移による変化を見守るのが得策である。“whom”に関し少し解説すればこのようである。

さて、こうした“whom”であるが、この語はいずれにしても存在の変化—消滅の可能性—を秘めているだけに、語彙の視点から言語学的に興味を引き、調査する意義がみとめられる。そのため今回は“whom”が*The Economist*⁽⁶⁾において、どのように用いられているかメディア英語調査の一環として調べてみたい。

I 調査方法

最初の書き出しで“who”は代名詞だと述べたが、実はこれは一括して表現するためそう述べたのであり、正確には疑問代名詞と関係代名詞に種類分けできる。そのため目的格の“whom”も二つの立場から考えることができるので、“whom”を調査するため、まずは疑問代名詞から考えて、疑問代名詞“whom”の調査については

- (1) 103,049語のうちに“whom”が何回現れるかを基にして、今回の*The Economist*の調査領域での“whom”の出現率を明らかにし、
- (2) 形の面より“whom”に言及し、そして
- (3) “whom”の用法的な特徴について言及する。

という方法をとる。

次に関係代名詞“whom”⁽⁷⁾の調査については、

- (4) 疑問代名詞“whom”の場合と同じような方法で、“whom”の出現率を明らかにし、

- (5) 形の面より“whom”に言及し、
- (6) 用法の面より“whom”に言及し、そして
- (7) “whom”の誤用に言及する。

という方法をとる。以上のようなものである。これが“whom”についての調査法であり、この後は具体的な調査にはいる。

II 具体的調査

(1) 疑問代名詞“whom”の出現率

今回の調査では疑問代名詞“whom”の実例数は13である。よって疑問代名詞“whom”の出現率は0.013%である。

(2) 形の面より見た疑問代名詞“whom”

疑問代名詞“whom”は単独で用いられることもあれば、前置詞とともに用いられることもある。このことは

who, whom as objects of a verb:

Normal English: *Who did you see?*

Very formal English: *Whom did the committee appoint?*

.....

A **who, whom**

In formal English we use preposition + **whom**:

With whom did you go? To whom were you speaking?⁽⁸⁾

と説明されているとおりだが、*The Economist*でもこうした“whom”の二つの形—単独形と（前置詞+“whom”）形—は確認できる。

具体的な例をあげると、単独形は次のようであり、

In fact, Ms Boothroyd is meticulously fair, and even keeps a detailed statistical record of exactly whom she calls from which parties. (ARTICLE 48)

例数は2である。

そして（前置詞+“whom”）形は次のようであり、

To whom should they be returned? (ARTICLE 2)

例数は11である。

(3) 疑問代名詞“whom”の用法

本来の疑問代名詞としての“whom”の用法は次のようなもので、

Once the patient has the approval of two doctors, and the prescription, he may choose when, where and with whom he will spend his last moments, and place the fatal drugs in his mouth himself. (ARTICLE 43)

こうした“whom”の用法は13例中4例存在する。

次に“whom”は明らかに疑問代名詞として用いられながらも、主語、動詞という文の要素が欠けている例がある。これは次のようなもので、

From the Russian side, it is hard to look dispassionately at the question of how much of this stuff should be returned, and if so to whom. (ARTICLE 2)

いわゆるこの省略用法と呼ぶべきものは、13例中4例存在する。

次に三番目として疑問代名詞“whom”が疑似人称代名詞として用いられている例がある。これは次のようなものであり、

But those ramifications are likely to affect who pays whom and how, rather than how much money good programmes make. (ARTICLE 31)

こうした疑似人称代名詞用法は13例中5例存在する。

(4) 関係代名詞“whom”の出現率

今回の調査では関係代名詞“whom”の実例数は87である。よって関係代名詞“whom”の出現率は0.084%である。

(5) 形の面より見た関係代名詞“whom”

関係代名詞“whom”を形の面より考える場合、まず次の引用を見ていただきたい。

- Relative pronoun as object and with personal antecedent:

Our professor keeps lecturing on AUTHORS *whom* nobody's ever read.

<formal>

.....

- Relative pronoun as prepositional complement and with personal antecedent:

I know most of the BUSINESSMEN *with whom* I am dealing. <formal>

~I know most of the BUSINESSMEN *whom* I am dealing *with*.

<formal, rare>⁽⁹⁾

ここでは形の違いをはっきりさせるため、三つの文を引用した。つまり最初の文では、“whom”が単独で用いられている形を示し、二番目の文では、(前置詞+“whom”)の形で“whom”が用いられていることを示し、三番目の文では、“whom”~+前置詞)の形で“whom”が用いられていることを示した。

さてこのように 関係代名詞“whom”については、単独形その他の形というように異なる形が三つ存在するのだが、これらの形を *The Economist* において指摘することは可能である。そのためこれ以後、実例と例数を示しつつ指摘してゆくと以下のような。

まず“whom”の単独形の場合、実例は次のようであり、

This instability has tarnished Mr Chernomyrdin's reputation as a tough manager, able to push through policies that would have been beyond the younger reformers whom he ousted from government. (ARTICLE 86)

例数は28である。

次に二番目として(前置詞+“whom”)形での“whom”の場合、実例は次のようであり、

Pauline Baynes, the punctilious and decorative illustrator with whom she collaborated, went on to illustrate the whole of CS Lewis's 'Chronicles of Narnia'. (ARTICLE 44)

例数は27である。この形に関してはこう説明できる。

がしかし、この形について述べることはこれでは終われない。この形には付加形—

(名詞等+前置詞+“whom”)—と呼べるものがある。そしてそれは(前置詞+“whom”)の形と全く別物ではないにせよ、区別せざるをえない。つまり別項目を設けて説明する必要はないけれども、同項目中で分けて考える必要があるのである。そのため付加形をここで取り扱わざるをえなくなり、取り扱うことにすると、その実例は次のようであり、

Opposition has come mainly from farmers, other rural folk and from women, many of whom are employed in public services which they fear would be threatened by EU membership. (ARTICLE 58)

例数は32である。⁽¹⁰⁾

(6) 用法の面より見た 関係代名詞“whom”

文法書は関係代名詞を含む関係詞節について

There are two types of relative clause: restrictive clauses and non-restrictive clauses.

A **restrictive** clause (also called a **defining** clause) gives essential information, and cannot be removed without making the meaning unclear.

A **non-restrictive** clause (also called a **non-defining** clause) gives information that is not essential and that can be left out.⁽¹¹⁾

上記のように定義している。なおこうした定義において“restrictive clause”と“non-restrictive clause”に“relative clause”を分けるやり方は、一般的にすでに了承済みで、他の文法書も同様な分類を行っている⁽¹²⁾。したがって、こうした分類は公認されたものと考えられる。

さてこのように、“relative clause”を“restrictive”なものとして“non-restrictive”なものに分けるのは既成概念化しているが、こうした分類概念は、“relative clause”の一部であり“relative clause”の特性と共通する特性を持つ関係代名詞“whom”の用法にも適応できる。つまり“whom”の用法は“restrictive”＝「制限」用法と、“non-restrictive”＝「非制限」用法に分けることができるのである。

*The Economist*の中にこうした用法の実例を探せば、前者、制限用法の場合次のようなものがあり、

He has also hinted that he holds a list of names of senior PRI men whom his brother had called enemies of political reform: members of the PRI's old guard and others disgruntled with President Carlos Salinas and his hand-picked successor, Ernesto Zedillo. (ARTICLE 89)

例数は32である。

一方、非制限用法はというと、これの実例は次のようなものがあり、

They also won the Conservative politicians who espoused them hymns of praise from company bosses, most of whom celebrated by awarding themselves huge salary rises. (ARTICLE 29)

例数は40である。以上が“whom”の制限用法、非制限用法についてである。

次に用法ということでは*The Economist*には、関係代名詞“whom”の特殊な用法があるのでそれを指摘してゆく。

まずは括弧内での関係詞節における用法で、その実例は次のようであり、

According to Bud Leibler, vice-president for marketing, they 'bought cars because Lee (whom they idolised) told them to; because they were cheaper; because there was a good warranty deal, and because, as the first with airbags, they were seen as safe.' (ARTICLE 54)

例数は7である。

二番目はダッシュで囲まれた関係詞節における用法と、ダッシュの後に関係詞節が続く場合の用法で、それらの実例は次のようであり、

- (i) This refusal to back the newcomers—whom France did not invite to this month's Franco-African summit—looks much like a snub to a regime with its roots outside la francophonie. (ARTICLE 45)
- (ii) One high UN man said such a tribunal would be limited to the architects of the genocide—most of whom have fled to Zaire. (ARTICLE 69)

例数はそれぞれ(i)が4で(ii)が3である。

三番目は引用符で囲まれた関係詞節における用法で、その実例は次のようであり

She has opted to have four Romeos and four Juliets, 'one of whom is a man', according to the advance publicity. (ARTICLE 83)

例数は1である。

(7) 関係代名詞“whom”の誤用(?)

この(7)のタイトルは「関係代名詞“whom”の誤用(?)」とした。ごらんのとおり、タイトルの終わりに「(?)」を付加したので、何か変だと感じられるかもしれないが、こうせざるをえない。それというのもここで述べる関係代名詞“whom”の用法は、素直に文法概念のフィルターを通して考えると「誤用」だけれども、実際の英文ではかなり多く見受けられるから、一概に「誤用」と決めつけられないからである。そのため「(?)」を付加したが、なおこうした“whom”の用法については次のように解説されている。

He refused to tell police whom he thinks is responsible for the guerrilla attack.

The pronoun ('whom') used here should not be regarded as the object of 'he thinks' but as the object of 'is'. Many sentences are made on this pattern.⁽¹³⁾

- While many careful users feel that it is important to use *whom* when it is correct to do so, most would consider that the use of *who* for whom is far less of a mistake than the use of *whom* when *who* is correct, as in: ◇ *The children, whom she thought were dead, had been saved.* The temptation is to use *whom* because it is felt that this is the object of *she thought*, but it is not. *She thought* is a more or less independent part of the sentence; it could even be moved to another part of the sentence. It is not an object of *she thought* that is needed, but a subject (*who*) of the phrase *were dead*.⁽¹⁴⁾

そして *The Economist* においてはこうした用法の実例として次のようなものがあり、

They include the Rodriguez Orejuela brothers (Gilberto and Miguel), whose specialities are transporting cocaine to America and money-laundering; Jose Santacruz Londono, who controls wholesale distribution in New York; and three other family clans—the Grajales, whom the DEA believes are important exporters of cocaine to Europe, the Herreas, and the Urdinolas. (ARTICLE 4)

例数は1である。

III まとめ

- (1) 形の面より疑問代名詞“whom”を見ると、単独形より（前置詞＋“whom”）形のほうが多く用いられているのが分かる。
- (2) 疑問代名詞“whom”については本来的用法、省略用法、疑似人称代名詞用法それぞれの例数はほぼ同じであり、用法を一つに限定しようとする傾向は認められない。
- (3) 形の面より見た関係代名詞“whom”の場合、（前置詞＋“whom”）の形およびその付加形のように、“whom”の前に前置詞等がくる形が多用されているのが分かる。
- (4) 関係代名詞“whom”の用法について、制限用法と非制限用法については例数にあまり差はなくまた一般的なので、取り立ててどうこういうことはない。が一方、その他の括弧、ダッシュに関連する用法については、括弧の使用効果について次のように述べられ、

Most commonly, a pair of parentheses is used to set off a strong or weak interruption, rather like a pair of dashes or a pair of bracketing commas.⁽¹⁵⁾

そしてダッシュの使用効果について次のように述べられていることもあり、

10. a horizontal line (—) used in writing and printing as a mark of punctuation to indicate an abrupt break or pause in a sentence, to begin and end a parenthetical clause, etc.⁽¹⁶⁾

このような“whom”の用法は括弧、ダッシュによる文の途切れ効果を増大させるのに役立っていると思える。そのため*The Economist*には、文のスムーズな流れを好まない傾向が少しあるといっても過言ではない。

注

- (1) Sidney Greenbaum, *The Oxford English Grammar* (Oxford University Press, 1996) 186.
- (2) John Seely, *Everyday Grammar* (Oxford University Press, 2001) 218.
- (3) Mitchell Ivers, *Random House Guide to Good Writing* (Ballantine Books, 1991) 142.
- (4) John Seely, *Everyday Grammar* 218.
- (5) Mitchell Ivers, *Random House* 142.
- (6) *The Economist*の調査にあたっては、The Economist on CD-ROM (Financial Times Information Ltd.) で1991年1月5日から1994年12月24日までのものを使用した。そしてこのCD-ROMを利用して、語“whom”の検索を行った。結果、ARTICLE 1~1452に“whom”が使用されていることが分かったが、今回はそのうちARTICLE 1からARTICLE 18まで—ARTICLE 19では“lead”部分に“whom”が現れるので省略—と、ARTICLE 20からARTICLE 89までの記事本体部分に含まれる“whom”を取り上げて、調査対象とした。
これを具体的に数字で説明してみると、ARTICLEの記事本体の103,049語に含まれる“whom”100語を調査対象としたのである。
- (7) *Whom* is largely restricted to formal style, and can be avoided altogether in informal style, through the use of *who*, *that*, or zero. [Randolph Quirk et al., *A Comprehensive Grammar of the English Language* (Longman, 1985) 367.] と述べられているように、“whom”は“formal style”=「硬い文体」で用いられる語であることを断っておく。
- (8) A.J. Thomson and A.V. Martinet, *A Practical English Grammar*, 4th ed. (Oxford University Press, 1986) 71-72.
- (9) G. Leech and J. Svartvik, *A Communicative Grammar of English*, 2nd ed. (Longman, 1994) 371.
- (10) “whom”の形については三つのタイプを紹介したのではあるが、ここではしかし残念なことに、“whom”～+前置詞)の形の“whom”について実証することができない。調査範囲に実例が存在しないので。
- (11) R. Fergusson and M. H. Manser, *The Macmillan Guide to English Grammar* (Macmillan, 1998) 88.
- (12) See Lynn M. Berk, *English Syntax* (Oxford University Press, 1999) 265-276.
See Kay Cullen, ed., *Chambers Guide to Effective Grammar* (Chambers, 1999) 22.
- (13) H. Blamires, *The Penguin Guide to Plain English* (Penguin Books, 2000) 157.
- (14) M. H. Manser, ed., *Good Word Guide* (Bloomsbury, 1988) 286-287.
- (15) R. L. Trask, *The Penguin Guide to Punctuation* (Penguin Books, 1997) 119.
- (16) *The Budget Macquarie Dictionary*, 3rd ed., (Macquarie Library, 1998) 110.

参考文献

- Aitchison, J., *Cassell's Dictionary of English Grammar* (Cassell & Co., 1996).
 Maggio, R., *How to Say It* (Prentice Hall Press, 2002).
 Newby, M., *The Structure of English: A Handbook of English Grammar* (Cambridge University Press, 1987).
 Palmer, F., *Grammar*, 2nd ed. (Penguin Books, 1984).
 Tallerman, M., *Understanding Syntax* (Arnold, 1998).